世界萬金

立身大福帳

四

函 93
冊 7

特別
へ13
4149
4

抑鞍馬山毗沙門天は羅刹伊勢人
の剣を授け給ふ毗沙門と伝へ給ふ延暦
年中の頃い新よ希代の疫病ありて
男女限りなく煩ひ死の中を不顧して
万民飢死る人とに伊勢人或秋の夢
に教へらるゝ事ありて新よ希代の
の日家に光を放つ城人清水の伝ふる多
門天を信に疫病巡りて往人歌苦あり我を
と救へんと願ひ給へと水に浸べ病人に
あさへよりて笑ひ給ふ見る者あり刹
守りと言中にさゝ見と往人よりて人々
に仇者一人を捕くるの夫婦者ありて
立身往人に対し毗沙門伝伝あるべし

No. 4147-4

56-4159

智恵と姿も新しの名女

すめ所に方位の日陰

雲と霞買の縁波の栄布

樟脂て二代栄松や塩家

[illegible]乃[illegible]男日やうに[illegible]家に入出

[illegible]ふい[illegible]れて[illegible]をむ[illegible]ふ[illegible]

[illegible]ふ[illegible]こ[illegible]を[illegible]乃道り

[illegible]松い[illegible]ん[illegible]ゆ[illegible]を[illegible]

[illegible]ぶ人[illegible]や[illegible]家[illegible]と[illegible]

[illegible]ふ[illegible]日[illegible]ん[illegible]

[illegible]な[illegible]ゆ[illegible]乃[illegible]

[illegible]乃[illegible]加[illegible]ふ[illegible]

立身大福帳巻之[illegible]

○多恵を次女を新の名女

素乃元の樹れまふわら秋の毒は葉の庭にちづむ

を草木ひろ[illegible]れおさてをのぐをびいんや

性ある人誰う愛別離苦の恨なりうん京ふ郭新

立殺して松や絵のぐ[illegible]れ浪家ふいふひいあ[illegible]ぐ梅ふ[illegible]の

[illegible]ふ[illegible]ろ[illegible]ぶ[illegible]完の毒よりうまれ[illegible]あいの歌

腹よ[illegible]ぐろあいり[illegible]れ雲ふ[illegible]ろ[illegible]んぐまて同じ

化野の高[illegible]を[illegible]ふ[illegible]山乃一りをあ[illegible]れ事を

立の[illegible]ぐや[illegible]ぐまて[illegible]を親族や[illegible]ふ[illegible]て

末の寿命の事これなき先立ごとしきうハ命とう生死乃道をのゞ名ゞさ後こをゝふ人の追善ハなゞくへて家をたさゝ貞女の道を立くがゝいとこひたるゆゑくハれと孫ゝくがさすゞ玉の姫乃ゝ人ねハつゝきゆゑのなゝいこそいつすき形見ハ愛子孝代の物ハこゝろひゝきを七日くハ忘月命ゝ忘月命ゝてゝや宰九月を色ゆきゞ江戸なをの御文数色ゝうきなゝとて長脇ハの深入き上法下塗稲イはゝと渋やれ信乳後ゝ金張の信拵ひまでゝ代ごとハ法ハ命を分て江戸ハなゝうけてハ代ごゝ三十六人の世伝二季のたゝ形ゝ

八重よ世間の四ひちぐみをさらて上下の男女をれハまハゝ子をゝうゝ母を鬼ハゝてみごゝとをを立ゝ代後ゝ法ゝ志学文のゝねゝ子ハなゝよゝに分てゝうき事ゝうちなれど別きゝ人ハ代乃ゝ永く一代分を行ゝすゞゞ川てんゝゝつゝれ命乃ゝ三川すゝやこ当人ゝかんぜねハ色さゝこゝゝゝゝに次女ゝいひ命ゝゝひ世ハ妻ひなき名女を妻ハ拵てをゝうゝまの一郎ハ若紀門我を人をゝをなゝい者ゝゝゝ代妻ハ子をゝゝ我て極ゝん掲座乃酒の腹ゝよ湯ゝ事をなく約束乃家の伝乃ん三まい府をゝ張をたゝきゝ

なるゆゑ種々物さびしき代ごとなん門徒をおーてをさめと
長功を月々ばたらし家代相ゐて終乃わくとらるゝ
なりけるごとを拾ひ集めよつまくとを学ぶわけを代
どもは志わりをそこくなれば縁人まうをさしろ
こそいとをを所より日を白ー西陣へけこそ門地七年
おかをの月く番て三月乃事ハ六月へのび七月の事ハ
十月へ成てなのづくるあ家業を大そう閑りに後家
ごは代へなりくハ誰が張をつゆに着ハなりーゝどん
門よ我ゝ白ゞ用を偶ひ絡れば若ひを代ごを使ひ
まあて先で世乃を沼世ずをあく海乃娘のきひてう

なゆゝよ家業のようおさまるを女ゝをなれば三家ハそくば
中業乃なかおかりーよる金ゞ三百あづくるびまー女義な
き長家の志学をれば者体はこて大世のまりよ
こでこ海乃事なゝ去世ハ生き分さ乃養的と生のさ
よ及び世乃乃後家潮とハなりねされば月日をこもろ
関寺なまれば門長をる三年をおりゝ体や七四長
の姫をいうのみて体乃他を今年十一事よなりね
志りきごを右ひを代ハ年老りゝさ者ごをハいるゆざ
血乃ゝ三ゝ代く我の行脚たのあきこだたごとをを
くをを男れるゞなきを家ハ心きひ一ゝさなるば

さるこゝを十五年の後仕成ぜ――あ面門さへ自れみな
――ゝを月まで動くゝゝ七年長までの公法――たゝる表
うをといりよゝ前の勝ゝなるこゝハそて一代使ひとゝつゞき
ゆをわゝばゝと今年ハ古老ゝゝ代古人まで一家不住対
糸乃せ絹布乃せあるひハ小麻彩まさハつき米屋
売ものの魚めハ売ゝ絲ごを拵てを三年あこハ古線
買をてを折ねだん多麻寿命あて中ゝゝゝうれ乃ゝ
物ゝ年ゝ及び拵ふまゝ女房乃自人のさゝきゝゝを
ゝゝゝ及ゝゝゝき年ゝあゝうまをゝるされば京てを大坂
てを主をゝまたゝゝ代ゝゝを使ひたゝ主ハ多け

きこゝを人を仕付ゝ主ゝゝ恵をはゝゝすゝゝ代ゝゝまれ
なり是ゝ君ゝ乃ゝを去ゝゝさるゝ人なり如ゝゝ親ハ
主ゝを死ゝ代ゝをゝゝたゝひたゝひゝゝ人倫乃ゝゝゝもけ
べ人倫とハ偽ゝゝゝ――者餌乃ゝゝ主ゝ縁ゝ奥ゝゝゝ
――やゝ代ゝゝハ死ゝ主ゝゝゝ人を死ゝゝ親ゝゝこの
ゝ代ゝゝたゝゝゝゝこゝゝゝゝゝゝ――ゝゝゝゝゝゝゝと命ゝ
ゝゝゝゝ代ゝ指人ハ名ゝ乃ゝゝ命ゝをゝつゞゝゝ
ゝゝゝバゝゝや後ゝゝを女乃名ゝなれハゝゝゝゝゝハ
神ゝゝ皇ゝゝ乃再他ゝを偽ゝべ――ゝゝ小雑役
わゝ母ゝ高貴ゝゝゝ代ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

えとり而ハ雲を高くするおはのちまさ異ひ金をバ
金張乃つゝみ丸まんのよい時れ一分たる色墨の涙入
まー度高ゞあたゝ祈バ冊ぼご入乃業用大幸れ せと
ーゞやー伝ゝく方をゝんれバ我ゞひ金ことちゞゝて
賣ゞ賞ゞとゞのゞられる不動乃出開を丸て一をこバ
ゞがある世いてすきバ乗を者ゞばこゝくゝりまん
とゝんゝて多ゝ れゝりゝふゝの柱へ南方朝ゞ亜文
さゝーて運ゞ乳をゝんゞゞてゝんきバ蜘乃本へ中ゞ家
年ハ交供水ーゝゝきびの板乃南へさーてゝ
ゝゝゝ年ハ大風ゝ吹ゝさ二百十日と敬生金ゞ外西と

寅乃月よりあゝきバ乳をゝゝのゝを者ゞ建ゞを今一
家ちゞゝゝゝきハ出ゝよ物けゝ者ゝれ美祝ゞのゝゝゝんぞゝ
ゝのゝをゝんゝゝく庭のゝゝゝい肥後中亜いゞを十百ゝ
乃業賞ゞを立ゝゞゝ神乃内へゝを入ゝゝするゝゝゝ
ひなれバ殺生食の寅を目前よ八千石の営務所
者ゝれ内ゝ食物萎ゞゝさハ八彩やゝ乃ゝるゝゝの玉へ
をゝー玉草鞋乃義袴をすげて三ゝてゝゞいよ
包ゝ服ゞーゝゝゝ極ゝて祖ゞをゝゝ乃きゝゝ
ゝなゝく穴ハ法のゞとくゝゝゝく名月ハいよく
さゝゝ海よ八月十六日乃曝なゞみの罪海の海

つきて證明寺中をいふ為ごひなりしれたび立まより
暫く山城乃ち田こりふざいハ早よゆるるを来あてかげ
をうらしね

○叶ハぬ事を方便乃眼

五を始む人ハ高の角よりをまきこ小西ニ才およびく
こりげりハ難のいろこよろをれしとる野大師乃織
給ふ出羽識形ろかを年猪高人の弟猪分数
し人々終の新方をよそれ寺平なる西乃足より
五れし足留去元をれは時ハ拾ふね及の及よきを
起きりさすが乾の目中さめず策数ハらずよ夜

まさ器傍　無量院门ありの下中さるよるの池をうん
是で忠人ハ上のなのりとさすれバ戒ハ東ハ右経町より
初て縄手ぶ新ん戸刃町　矢坂清水薮乃下下ハ
いなりミハ土手町　又ハ天神の前　七なれ松原方ふいろの
網をえりつろくよ舞子白人さてハ市売などうりて
白中晴瑠璃ぶんざるよ辞下　又系河原北石垣
くるする転びまて二条豆腐ハいふまる夜　縄で
風こと小判で物ごとを法り寺とねさいするよハあり
くる恋の自由あると無りくなれ寝まで来ひ夜
常ハ狂そんをけすきての仕色し　皆身格破滅

の姿ひぞうし極まりなく新版のみやこ色うちんどやう
ほ名乃曲輪八百万人の城下ありと雖く夜乃世の火
明やさ夜間なく晴しらる空乃星ありとも比べしを
文天祢乃乃中よ大阪乃せ間く揚や出屋火一方焼を数
二六時中の大代祢ふよ大どん事社のきづぎ付ゆく
すべて大阪中ハ張をすいあづる徒家乃俗ハ家りうべし
其外茶やうく座乃数く町中事分ハ多の世と物
て去農工商の外ハ極貧なれば貧者あ家人たくさ
ハ世のよりみとりよ人の迷ひハ絶たくきれば恵なり
わさない御ハまぐらふ物りこ乃の軒ハりのとて御

さ高ひそんだやうしてのうりを倒りくをはりハ
行をとハ物りきりさまこバ義之湯ハ人とくりさりよなりこと
の故さるやうを追立れ御のやりいを自と侍人とふ形色
よゆづりたさ其身ハ親兄弟の而とをと大阪の内ハ無
びりさくやうくと伝来ハ事をたづりて大阪のち国こいよ
ざい丈行久しく言語したる丈和ようり役害よりり
みとりとハいりきれ者び道すぐり偶やうをあんど
三年てさいりひ放生会の翌日なきバ八幡ふりハつで
なりぐ久しく毎夜ちうちく家さ乃ゆり立
ようたたるりりせバ大阪へ来さ初什方りり出乃色

ゆてさく左兵衛の親類ハいつくんだぐけでまろ屋ハ
ほこ屋ハ毎日ひつくひなさまてるハ屋まて遊こやりと
ろ〳〵暮まで出立ようさうとそへハさごくれよう
痛入ちろ嘆さて大坂一門ごろの嘆あ〳〵たづ〇あで
来合ハかろもゆまはせうきれごもと大坂のかはゆ母とハ
ちがいざいあの義ゆもこバ和ゆれふ月ゆきあこの浪伏
月まで祝ようろさ〇ハ俄よ弟村ゆてハ親ひがこー
こうくゆたく〳〵バ日ゆ晩じーまはう程よそまこ嘆ゆこと
ハバ非業ろせて夕食ゆよ冷飯すて何よゆろも
久ーぶりゆや祝さろ母まこいふうこれろ〳〵バいろの年

てい自のあのさろよ疫年ハ格なく〳〵ゆけきごを格なの
後和いろ宮ふどさろ浪ハ出ゆなさまたるバようろ浪ろ
ハ格さく和疫まで八毎晩年がおまたるをゆ母ゆ母まれ芸
日ゆ晩ーて雅よ人ろまあい程ふ大稽八格までおゆて
ろんぜといハバゆや見ゆ母ゆ牙こーらくーて就立といね
でろのこゆさうゆ家ハ一大年此分別而ゆ所ゆ母よ
ろ凡祝格のち人裏のゆ母ごけてろふおたるゆ母ゆ和
れこーーうんといのそのゆ通ゆ目ゆ見ゆてう
きれいていゆ母ゆ嘆ゆ和ゆ母ゆを草鞋ゆ和いで
よ人あゆろと嘆ゆ和ゆよ和ゆ母ゆよさうゆ母ゆやうく

四郎を元亜しりうや、乳きひーてさうか
正根が付まーてごぎる病ぜん八幡て市蔵山
うゝ山下りをとれがむこて最寄のようなきてひさ
かぎんや〳〵元前うゝ脇ゞいてみまーさを野の
場て思ふて悟亜ーてちりまーさきバ頼ふころう
つあて乳を乳失ひまーさのりうや別八弟ハござう
ねゝ通の事でけきづういを掛まーさとうバその
間よ月ハ晩ゞ家てい弟ハこてうを亜とこうんて其
筆なゝ〳〵ハ又亜で冷さきやうてハようるまいゆて
明ゝ雪亜ゝ雪よりゝ〳〵きやきこいうてようくまづ今

宵(よい)ッ張ハとかくあそびになりね

○雲(くも)を霞(かすみ)と難波(なには)乃米市

聖人(せいじん)ハ道乃光を高く教(をしへ)の要(かなめ)とするよしや然き
ども末代の人われがちに光をみださしてまをたさ賢き
壊(こう)悔(くわい)すきども猶ろねなり公共勝ハなじみのこきやう
を仕就してありしんを的(まと)とるやうにて大坂よりわれ
ところ遠(ゑん)遠(まいまい)ひる田舎を永くハ足をとゞめさく大坂
くさいやくをめぐりし四五日逗留(とうりう)乃内にいのりしへの
悪所ずゞ遊(そぞだち)の方へ入蟄(もと)したるをおもひおこしきを
りて寝びハ光半(ねばつ)ばされども志門こう〳〵ら〇べ

立そのんべき部(げ)をなく気よりそてハ諸(ろ)所(と)よ立(たて)あり外
ハなしさいハひ西洞院四条よる所都やとりやすよ
守のあびハ毎さ子ども乃まなハ志ろ孫ども来福る
ゆて地黄(ぢわう)乗丸(げん)を一曲(きよく)そのへ入むこの手なれハ門
の機(き)嫌(けん)を見るとりて以てよりハ大事とがそんして
今度ハ出我ことなハよなわるねやうにおもふくだん
く身代志学(がく)を理きバてハそさふすゞむりへハ
大坂のござろ水を飲(のこ)ふてる服中甚なだしハ隠て
なくまじいるさたりし好(すき)ことりすまで人ハ落(おち)め
とうん捨(まて)ねをゑて誠の友(そ)とはきハふ自由なる竈(かまど)

の四ま立ち煙を分ていうやうとを見れくるくまでゝ
ふん毒けしまくせんず事をやまし強きことを義太夫の
庭がかりのくまくまきばゝ乳ぬ毒のよゝ義三郎ト言ハ
芸屋ハすこゝをゝ乳をひゝしゝ毒つべくにかゝ乃お入と
ちゝひ米乃場高ハりとなゝ和と賣なゝあをうゝ
てあゝのくをゝつてをお張だゝをゝ乳やりして米を
源にのゝの義を結乳のこゝゝ高のある事てハなゝへ
張なゝみすきばこゝうゝにゝ山越へをなき接よ新さ
そて云事みをなゝに通てこゝゝて庭のゝ舌事で
をゝ　さゝるまゝあゝくゝこゝろぬ好ゝな芸中を毒賣

とまてたくゝ高とゝ四世化人と事くゝ高ゝとゝを四世
なゝ儀義ま接張とあゝハお場へある門のおゝんづく
ゝ高を四ゝとゝゝりゝハ千賣毒のお入でを芸屋切ふ源
事已ゝ高ゝに欠落するハまゝお乳お門でゝぎるゝといゝバ
いゝき芸屋の事ぎやハ強張とゝゝてするゝゝち
さゝお入ハ芸屋切ゝやよゝ高よゝ入張の乳をせぬゝ
ハゝをゝりゝけたくゝ乳そんゝたくゝあゝまゝくゝいゝ合
庭ハあくゝぬくゝを乳事ぬんなゝを張でゝこゝき
たゝいくゝやゝゝにゝて吹ゝをくまでの事廃ゝくゝ毒乳
きひハなゝいゝ芸ゝゝやゝ和にのゝくまでハゝをよゝかく

まつて仮ぶしのことを其ゝの立く進上致よ
今一ちんぼうさきやきさうもなぐ〜為ハ云の上ハ仮
屋で万事れ志ゑ学ぶ大仮こいちがいきうそれ学ぶすう
ハさうざめて学ぶんでうをごぞ〜毎ついてハ今まで其ゑと
うんとへきうくてゐ色のたゝなこゞ者一でごぞる。学でハ
仕愛てをこうや楊ゑひいないさうよ及ひ乃と嘗
むまでゞやこらくハ門弟をさゝあてさらせんう〜
だんぐ出嘲のやうすをゆつまはきバぶ仕合で
おきやう〜なゑでごぞるをまするさうもなぐ〜出来ひ
内のきもとなひいづくゝゐをれゝいなゝいでこぞう

ませう稚ようるゞすうゝをけゝを配さきやうをまする
おまぞをうゝ引来ゆ仕ふゆるれの仕世をなさをませう
板ワさ子宗ハ出りん及びの為ゝ仮あゝゝまて万事
仕ぶ月出よごぞうをませうきまごをいづくゝをわう
紂てごぞうをまするまでハ我門円せんよ田舎てすこ
ゝを仕ごんをゑなのさまをまるなこ人やうなうないさう
さうをこそハ京前稚うて迷をゆいまるくゝハ
ふせうな臭をゐんせ仕廂入ゝうはゝ後よ世話ゆを
京上脳こいゆハ孫とゝ学ゝをけるゝ又門弟てい引
ゆやさまきるハ仏こう彩ざい表の松屋ゐよを

代れあるべきはずなれども仕付なくまきて其の跡へ人をうゑさせるゆゑ
ゆゑ作るべき能用方をやはり其子を養ひてあるべきを
所為なくて古人世をさとりとませのでこやさきけれハ
よろしくこゝろがけすべきやうすゝめよやゝ慎ずこゝろをて
元ゝまでくゝ紙をきゝ一ぱいそれハ早速明るゆゑへいさ
させやはよりの面てすひ先の事ハ生て孫ごを先
水らの高なんでをさきれひはるうゑへ作りぬ

独学て二さびゝ学ばれや

奏ゝ和と西宗ゝ乃ゝ方と孫よ二文の学ゝハなゝ
ゝ西ハ波浪のさゝらよりきゝ聖人と恵人と心

法よ二門ハなゝ結むと孫ゝ孫ゝ孫ゝハ孫ゝ
ハ其生れつき乗和ゝ乗和ゝ手跡人義ゝハすゝれ義
用を天元術の其ゝ其ゝはを為ゝ学問の力をゝ
孫ゝ不浪て部ゝ部ゝ孫ごゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ孫ゝ
孫ごゝ所ふゝゝなゝ愛ゝさゝゝをゝゝてこゝゝを
愛ゝゝよゝれゝば皆ゝ象形をまで入海をやゝまんゝ
よゝれゝば又毎三毎を元佳合ゝゝるゝれハ乳母ゝ
ゝ見ゝて中和を七りやゝ孫ゝそれゝよゝきて奴僕又
三ハゝよゝ家ゝ下ゝやゝゝゝえまて法分よ其人て
のゝゝハ浪まで折ゝむ趣ゝて和ハ自ゝゝゝゝ孫ゝ

野ぶ雲深ゝ作ー散れよう乃て仏ぶ乃冊波ご入年
之後梅こ所ずいよ毋ゝ今ゝ家紙法をみごさ毋に
ぐさ而なれ松盆屋へ目乃人の日より四又日勅ゝ乃人へ
のよー家乃勝ゝ小ゝ称ごゝ毋ゝ仮一毋ゝ婦
家ごの出ぶこよう可ひ一年毋ゝ付婦いよゝへ
乃鼻紙代なまごゝ出物のあるとさいまひよ目乃人の
目より毋ゝ見を毋清水乃時を其分八者へ寿ゝ
に迷を勅ゝうゝ八分を務よはさくゝうてん外の者
芸ハ知りく芝居毋ゝ毋ゝ毋ゝざゝうけごを我の
方へ八目を乃毋ゝに弱ハ素明より起て婦明まを

おこし病るハわそく初てゐ世戸のたゆりを
ぶけ火れ元とゐんまつり盆三月ゑ三るゐ貢へ
をゐんゐゐび一年中ゞたてゞを使ゝり那よハ
門にまでをゝ朋輩ゞ病わけてゐ三わり
病ゝよ三年三陽ゞ戸をあけぬこいわ半ハなし
其外れ役よ都てゝ半ハ人より先へ勤わ江戸店
の役文を琴味してゆり詰ゆうたゝの日ゝれ用ゐ
元を付ゑゆれバ軒まゝゝの極を吟味ハ弁
ハ義の戸まへをゐ借や中へゆゝのまゝりをゐれを
江戸れ用ゐ世の半いゝよれゐび勝をまゝり

の御米薪味噌しハまでゐゝないゝの元をつけ
まゝ三奥より大切よ江ゝわなゝゝよ藤をゝ世ゝゐん
そゐゝて朋中ゐのそ稼こをなく物ゝて一月郭や
をあゝバゐ用ゐ大世の私ゝなゝ永の大雑よ吟ゝし
なゝまこゝるゝゝよ方角を矣ひ外ゝり来ゝゝ若
ハ佛ゐない堂へ来ゝりゐるゝゝに云ゝゝゝよゝて色
人浸家こを稼んごゝよ員をゝけゝまゝ大半ゝゝる
ハ義を屋ゝんゝゝまゝゐ藤三を親ゝよゝなまバ
ゝ来ゝよわゝへ来るゝる時江戸ゐゐ人世ゝゝ来ゝ殿稼
作へ郭ゝおゝゝゝ市梅ゐ市用ゝゝゝゝ書具金張

の御用今安外乃はかくて方ふうをと入き淀よれ
目乃へまでおぼつかなかりしまぐ仕方へハ何
れ御用を仰付されていづきを明暮ごとをうる
く毎日御用窺ひよりあいへども仕方ハ代りぎ
外ありハ恵よ御用をとうぐひよりよ付ば役人ハ元
を此よ思ふ乃はに用ごをハ乃れくみへれ世
付らまひ御何をを御合よひへをを分及ねはし
や鏡に義を人やをろハおを此乃ひをて家外
ありや稲乃為を以て仕はお入仕はに見人へまでおぼつ
やとを仕家私義貞の御はを仕ふ人へ仕信りひハ御

外く仕方ふうや外乃はに用をすこーを御の人へ
いろをせふ家の御やを年十ろふよは勝ふ家く
へハ仕ふ人乃ふせをを此はんなきて恵をづ物ふ
信見いをーー殿下前乃はらくは見人へをを御ぼ
御入部の御用いろをを家仕方でうれのーーをせ
ハ淀御ごを信ふく御ぐ初世をての和義ふれでを
此御義を為ご信見ーーてふ付よは大名の御用
をををく所人ぐふをせふくふをを云備をせひハなふれ
殺ひごうくハ義を為ご殺ひよまふせて御殺義の
献ふ和ごを俄ふ御へ吉日を撰でたび立義を

ハれふうろあるとたんぐたのうるかりもうきをゆて
いよわきめて立を我るのやうに真実のう大坂よ
思ひ道中ゆづうひーてけげうをなく江戸よりて先
假人中をうけまうるとは殿様れ入ゆのれ悦ひの
ためのうせうゆるるを清ゆ的五下ひ悦きなぐゆれ公
仰とてきれ同ゆんへこひ縁ひひついてハ今度はこー
らんのれ用義代の的ようせうよれ立ひ更へ外へ仕
付らきひよ　御代くれ御用を形ゆまり
け安れ怪びのれ用をゆるるきひ結合ようなゆへバ
御服れ道具のれ用ハ余へにあるを付ゆき義

渡ゆれ用はうるいう和めこれ断ようれ所変りと変ひ
元ゆみきをバ元ゆう御奉老を張假人を清ゆ的ようせう
ゆて自然出てつゆへなう初れ渡の出用れこを弱ゆれ
まぐく思ひくゆれ用ことよ余へ仕付ゆうし
強ゆ強ゆを義を湯ゆ見元ゆて弟妹なゆ形ひ残
ようーうび極く物数年れゆへのようこて相母義
申ゆげゆう山上ハれ用ゆれゆを付ゆうべー奉御
渡の元ゆ変なゆき和れ用ゆ有ゆくひへを長ゆへ
ゆを万一れてづゆへゆうれ用ゆれ用ゆおをひやうみとの
出年ゆてけんとゆを納ゆを清ゆ的渡ゆん義ゆこて

引誕蔵主の取目ろ人くらをあびようお願仕服はいりて
おらぶ所用れれ道具一まき同様ゆてうけ丸仕張
地服わ角さ絵領ーてみ来春はへ部の御仕むういよ
ゆりうさ育仕いとあ戸徳所前はいりてよれよだれ
あ中ま様使人中まで前尾ゆうあ丸ふれ被へらへ
ほのゆをたまよ使ーてたあ仕ひをなくはき
ゆうーうば後家ごを結一ひんをあの岸まで仕及
義を傷う働稼まさらとさーて則一家の内ふう
後家ごを勧ゆをうの家賞を敬なふいりまで
を敏不昌ーてを組の功をうーなうねやうよなさく

こう死人に勝ーてを演の仕原切なきとうく人今年
経性はなーはたれ行験のゆーいとあくまさ人と
いへば仕うへは義を傷後を法くの親分をてまは
たびひよ死を会せ教永くれ家れ義弟ゆるやうに
孫まをなーうあへと法くの又方の一ひんういろく
勧らまーうば後家ごを法うへはとをかくをとうけ
会結ひて則其後前さまーうば義を
主て稼也ちう法分ゆ丸て親を主ゆう世後とを
職今まで勧のまを大切よ為くかよ為ゆ主を義
義をひさびゆう為なーとうく命ゆん後はいり

までも出家の境界をして自分の所作をそろうるか
道ならん我きしバ此身を私為我よなし あさましひ
只今までの此義をえずに二人前のちへをおかまずしきれバ前
にもまつたる出世ハ今生きれ共せひ出来うさま家下けやう
にこれをみの死骸合家内の肝心までも為にしに此外を
見すまじ盗家も主従互によ寄りすなる分配せんして町へ
まで愛子入いろく実見をして人からましかバ此上ハ禅にる
に人面なく則死人の名跡を絶て わや清れ多つさ者を殺
主と丈ねよ残て世ちのそうつとをなふ決而私たる人への状
手きさせられていよく訴え悌み四千貫余の身神よ

是かて老人の身をでしく清の由たれを思うてきよらハわづかなる人
生きと善悪を論をけばよろしくんかをよく念をいちどに所々家
の塗ひ機り析よ六度の樓ぐさ庭根八尾樣さま軒白の人
羽樣て十仮屋のいそ儀式の王だい八龍山あのかまのつさの風
琉璃樣よ歌舞の異を様家具ハ皆稀しらぬ花ひとく其外一切
の結び見入まで清の物一銭よ人能のしるくちみ此浮り見
不死で八世界中此あかりしまる割ひ可しきれバ大世の
人銭を飲一文八の者二さいでをとまでされまこそひとう歌
此世ひざとはのづらくさを学んで平和ばひよ霊
をけうき栄末をなくせ根らうん定をきう上ぐさを

性善ふりはひ[illegible]代をたもちまれば[illegible]
[illegible]ーー[illegible]神ハ[illegible]
[illegible]とつゝ[illegible]ーーよほど[illegible]
代の[illegible]なれば[illegible]の[illegible]ハ[illegible]中[illegible]ーー合
[illegible]ーー[illegible]ーー[illegible]
[illegible]中[illegible]ーて[illegible]年[illegible]分[illegible]ーー今[illegible]ーー
[illegible]ーー[illegible]ーー[illegible]
[illegible]ーー[illegible]ーー[illegible]
[illegible]ーてたつこく[illegible]
[illegible]身大[illegible]帳巻[illegible]